

大宮教会の皆様、
主のご降誕、おめでとうございます。

毎年、12月になると、世界の人々はクリスマスを祝い、忘年会を行い、新年を迎えるために、いろいろな計画を立てます。信仰をいただき、キリスト者となった私たちだけでなく、未信者の人も喜びのうちに、降誕祭を待っています。

司祭職の恵みをいただき、あちこちの小教区に派遣されたわたしは、信徒と未信者が喜んで降誕祭にあずかることを実感することができました。他の月よりも、12月になると教会に電話をかける人が多くなりました。信者であるか未信者であるかに拘わらず、彼らはクリスマスのミサの時間と参加について問い合わせて来られました。今年も同じでしょう。未信者の人は信者と同じく降誕祭にあずかることを望んでいます。コロナが起こってから、私たちの小教区は教区の指示に従い、皆の健康に配慮した上で、ミサにあずかる人数制限を決めました。今年のクリスマスミサにおける人数制限は昨年と一昨年より、少し緩められました。

日本と世界のあちこちの人々は、クリスマスツリーやイルミネーションや馬小屋を準備したり、飾ったりします。毎年、ローマにおけるペトロ広場で、飾る馬小屋の形が変わります。というのは毎年馬小屋を作る担当者が変わるからです。私たちの小教区は待降節第一主日から、お御堂の外でイルミネーションを飾り、お御堂の中で馬小屋を作りました。

待降節第一主日をもって、日本のカトリック教会は新しい「ミサの式次第と第一～第四奉献文」を実施することになりました。この式次第には司式者と信徒の唱える言葉が多少変えられました。それをスムーズに唱えられるまで、時間がかかるでしょう。

主の降誕祭は世界の人々の喜びに満ちあふれる祭りであると言えるでしょう。キリスト者である私たちにとって、降誕祭は大きな喜びの祭りだけではなく、意味深い祭りでもあります。その日に、私たちは教会と小教区と共に受肉の神秘を祝い、神の御独り子がこの世にお生まれになった日を記念します。

フィリピの信徒への手紙の中で、パウロは人間に対するイエスの共感と謙遜について、次のように述べています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕（しもべ）の身分になり、人間と同じ者になりました」（フィリピ2・6-7a）。

人間となられたイエスは私たちと同じく喜びや悲しみの感情を持っておられました。ですから、イエスは私たちの感情によく共感してくださるはずです。福音書の中で、イエスは苦しんでいる人々に共感し、彼らの病をいやしてくださったことが語られています。

「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ 4・23）。今も、イエスはきっと皆さんの体力の衰えと病に共感し、支えてくださるにちがいありません。

教皇フランシスコは昨年、7月の第四日曜日を「祖父母と高齢者のための世界祈願日」と定められました。この日を定められたことを通して、教皇は私たちに教会が祖父母と高齢者に対する特別な関心を持つことを示しながら、彼らが教会において重要な位置を占めることを思い起こさせてくださいました。

教皇の呼びかけに従い、小教区の共同体との関わりを示すに当たり、私たちは健康面の問題で教会に来られない方のために、お祈りをささげます。その方々の姿は小教区の共同体の中にまだ残っているのです。年月が経つにつれて、高齢となり、病気にかかって、日常生活を送ることは大変なことかもしれませんが、頑張っていることは一つの祈りになるのです。ある神父の述べられた言葉を思い出します。

「どんな人でも、

『私の人生に

どんな意味があるのだろう』

という疑いが心をよぎる瞬間はあります。

それでも、意味があってほしいと願い、

きっと意味があると

信じて生きてゆくわたしたち。

生きるということは、

そのこと自体が一つの祈りなのです。」

健康である方も健康でない方も、小教区の共同体のために、お祈りをささげてくださいますようお願いいたします。

どうぞ、良いクリスマスをお迎えください。

2022年11月30日

大宮教会主任司祭 谷 国定

おおみや教会通信 2022年12月号